法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

用言・コソアド系連体詞に後接する「ぐらい」と「くらい」

玄, 宜青 / Gen, Gisei

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化. 論文編 / 異文化. 論文編
(巻 / Volume)
15
(開始ページ / Start Page)
101
(終了ページ / End Page)
111
(発行年 / Year)
2014-04
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010071

Hosei University Repository

用言・コソアド系連体詞に後接する「ぐらい」と「くらい」

玄　宜青
GEN Gisei

0. はじめに

接辞「くらい」「ぐらい」の語頭の清濁について、例えば『明鏡国語辞典（初版）』では、

「くらい／ぐらい」は今は区別なく使うが、伝統的には、体言には「ぐらい」、コソアド系の連体詞には「くらい」、活用語には「ぐらい」「くらい」ともに付いたという。（「くらい」の項、「語法」欄）と記述されている。大まかに言えば、かつては「くらい」「ぐらい」の前接語の種類によって清濁に使い分けがあったが、現在ではその区別がなくなった、ということのようである。

現在、確かに、この位置で「ぐらい」を使うと日本語として不自然であるとか、ここで「くらい」を使うのは許されない、というレベルでの使い分けはほとんどない。わずかに金城（2011）で挙げられている、「いつぐらい」に対する「いつくらい」が若干不自然さを伴うというケースぐらいである。

ただし、「区別なく使う」というのは、一方を使うと不自然になるということが（ほぼ）ない、というだけで、全く同等に、ランダムに使われていることを、必ずしも意味しない。このあたりのことはすでに一部金城（2011）でも触れられており、上記「いつぐらい」と「いつくらい」の件のほか、たとえば書き言葉資料である BCCWJ[1] の「書籍」部分では「くらい」が優勢であるのに対して、話し言葉資料であ

Hosei University Repository

るBCCWJの「国会会議録」部分では「ぐらい」が優勢であることが示されている。

本稿では、主として対象を現代語書き言葉資料にしぼり、接辞（副助詞）「ぐらい」と「くらい」の分布の傾向の一端を明らかにしたい。結論の一部を先取りして言えば、調査の結果、やはり「ぐらい」と「くらい」の分布には、出現環境によるランダムとは言い難い偏りがあることが明らかになる。

1. 先行研究

1-1　湯澤（1954）

「ぐらい」「くらい」が接辞（副助詞）としての用法をある程度幅広く持ってきたのは江戸期と目されるが、その時期における両者の分布について、管見の限り最も記述が多いのは、湯澤（1954）である。湯澤（1954）は、江戸資料における「ぐらい／くらい[2]」の分布について概略以下のように述べている。

A 体言に付くときは「ぐらい」

B「この」「その」「あの」「どの」に付くときは「くらい」[3]

C 用言、助動詞に付くときには「ぐらい」が普通で、「くらい」のつくこともある。

具体的な用例も挙げられており、Aの例として

（01）一筆ぐらゐお返事を下すッても、まんざら罰も当たりますまい。（江戸紫）

Bの用例として

（02）どのくらゐ久しふございませう。（英対）

Cの用例として

（03）わちきが往かれるくらゐなら、ぢきに往って来るはね。（花筐）

等が挙げられている。

Hosei University Repository

上記 ABC についての湯澤（1954）の記述のニュアンスは、まず C については「ぐらい」が「くらい」に対して優勢であるというぐらいの物言いである。また、A については、自ら一例そうでない（体言に「くらい」が付く）例[4]を挙げており、若干の例外があることを認めているニュアンスである。B については確例としての例外の記述はない。

このような湯澤（1954）の記述については概ねその後も受け入れられ、確証はないが、0. で挙げた『明鏡国語辞典』や『日本国語大辞典』、NHK 放送文化研究所編（2005）における記述も、この湯澤（1954）の論述を踏襲しているように見える。

1-2　金城（2011）

いっぽう、現代語においては、「ぐらい」「くらい」の分布については等閑視されることが多く、0. の『明鏡国語辞典』のような概ね「区別なし」というのが大方の理解である。そのなかで、本稿と同様、両者の分布の偏りを見ようとする研究も若干ながらあり、その中で管見の限り最も豊富な調査を行っているのが金城（2011）である。金城（2011）は web 上の BCCWJ デモンストレーション版（2011 年 4 月時点）を調査し、「くらい」と「ぐらい」の出現についていくつかの調査を行っている。金城（2011）自身は完全な全文検索ではない可能性がある旨述べているが、後述の本稿の調査結果と照らし合わせてみるに、大きな問題はないと見られる。

金城（2011）の調査中でまず重要なのは、0. でも触れたが、文章ジャンルによる「ぐらい」と「くらい」の分布の異なりである。細かいジャンル別の用例数（ヒット数）は金城（2011）を当たられたいが、「書籍（1971~2005）」と「国会会議録（1976~2005）」の用例数を引用すると

Hosei University Repository

	「ぐらい」	「くらい」
書籍	7072	14063
国会会議録	1800	652

となっており、「ぐらい」と「ぐらい」の多寡が逆転している。話し言葉的な資料と書き言葉的な資料[5]で、「ぐらい」と「くらい」の多寡が大きく異なる（可能性の高い）ことについての、この金城（2011）の指摘は重要である。

金城（2011）はこのほか、「ぐらい」「くらい」の前接語用例数、後接語用例数のランキング調査等を行っている。この調査については、本稿と興味が若干重なっているところもあるが、非常に重要な関係を持つわけではないので言及を控える。全体的には、本稿ほど、「ぐらい」「くらい」の出現頻度の比に興味が特化しておらず、概観・特定語彙における現象に興味の中心があるようであり、湯澤（1954）の指摘への興味が中心となる本稿とは方向性が異なる。

2.BCCWJ2012 版での「ぐらい」「くらい」総数調査

本稿は、上記金城（2011）のデータも参照しながら、主として書籍資料における当該の「ぐらい」「くらい」の分布をまず概観したのち、「ぐらい」と「くらい」の出現頻度比を中心に調査し検討を加える。

まず、本稿では、BCCWJ2012 版の「書籍」部分について、記号列「ぐらい」「くらい」で検索を行った。検索は web 上の「中納言」ではなく、DVD 版のデータについてエディターソフトで行っている。検索結果用例から、「うすぐらい」「いくらいい物を」ようなバグの用例を人手で排除し、用例数を出した（数人の補助者による排除のため、若干の誤りを含む可能性はあるが、決定的な支障はないと考える）。調査結果は以下の通りである。

Hosei University Repository

BCCWJ「書籍」
「ぐらい」2229 例
「くらい」4681 例

以下で「ぐらい」と「くらい」の頻度比を検討する際に、「くらい」の用例数／「ぐらい」の用例数という値を用いる（くだけた言い方をすれば、「くらい」の出現頻度が、「ぐらい」の何倍だったかを示す値である）。この調査での値は、4681 ／ 2229=2.1（小数点第 2 位を四捨五入）ということになる。

この、「ぐらい」と「くらい」の出現頻度比は、金城（2011）の BCCWJ デモンストレーション版「書籍」における調査の結果である、14063 ／ 7072[6]=2.0 という値に非常に近い。また、時代は若干古いものを含むが、近現代の小説を所収する「新潮文庫の 100 冊」から日本人作家を抜き出したものを同様に検索すると、「ぐらい」888 例、「くらい」1679 例となって、頻度比は 1679 ／ 888=1.9 ということになり、これも近い数字ということになる。まずは、書籍類の資料においては、「ぐらい」と「くらい」の出現頻度比は 2（すなわち、「くらい」が「ぐらい」の約 2 倍出現する）ぐらい、という数字が目安になると思われる。[7]

3. 用言等に後接する「ぐらい」「くらい」

次に、本稿の主な興味である、「ぐらい」「くらい」の出現環境による頻度比の偏りについて各種調査を行う。主要な資料は前述の BCCWJ「書籍」、補助的に、「新潮文庫の 100 冊（のうちの日本人作家分）」を用いる。主要な調査項目は、「動詞につく場合」「形容詞につく場合」「コソアド系連体詞につく場合」である。

Hosei University Repository

3-1　動詞に付く場合

まず、動詞に付く場合を調査した。ル形・タ形ともに検索を行った[8]。下記表 1-1 を見るに、「くらいの用例数／ぐらいの用例数」という形の頻度比が、全体では約 2 であったことと比べると、動詞に付く「ぐらい」「くらい」は、「くらい」のほうに偏っていることが分かる。

表 1-1　BCCWJ「書籍」における、動詞に付く「ぐらい」「くらい」

	ぐらい	くらい	頻度比（「くらい」の用例数／「ぐらい」の用例数）
動詞ル形	244	825	3.4
動詞タ形	73	212	2.9

補助的に「新潮文庫の 100 冊（日本人作家）」で調査を行った結果は、下記表 1-2 の通りである。こちらの調査でも全体的な頻度比 2 前後を大きく上回っており、「くらい」に偏っている。頻度比の数値を見ると、「新潮文庫の 100 冊（日本人作家）」の方がさらに「くらい」に偏っているのは、こちらのほうが時代的に古めの資料が含まれているためである可能性があるが、この点については今後資料を増やす、調査の仕方を細密にする等の補強調査をして検証する必要がある。

表 1-2 「新潮文庫の 100 冊（日本人作家）」における、動詞に付く「ぐらい」「くらい」

	ぐらい	くらい	頻度比（「くらい」の用例数／「ぐらい」の用例数）
動詞ル形	61	304	5.0
動詞タ形	18	98	5.4

Hosei University Repository

3-2　形容詞に付く場合

形容詞に付く場合についても調査した。ル形（基本形）とタ形の両方を調査したが、タ形については極めて用例数が少なかったため表からは外してある（「ぐらい」0 例、「くらい」1 例）。また、比較的用例数が多かったため、形容詞活用をする助動詞「ない」「たい」につく用例数もカウントしてみた。大まかな傾向としては、動詞の場合よりもさらに、「くらい」に偏る傾向が強い。[9]

表 2-1　BCCWJ「書籍」における、形容詞に付く「ぐらい」「くらい」

	ぐらい	くらい	頻度比（「くらい」の用例数／「ぐらい」の用例数）
形容詞	34	203	6.0
助動詞「ない」	33	218	6.6
助動詞「たい」	7	54	7.7

補助的に「新潮文庫の 100 冊（日本人作家）」で調査を行った結果は以下の通りである。

用例数（特に「ぐらい」の数）が少ないため、頻度比の数値についてはある程度幅をもった解釈が必要であるが、やはり「ぐらい」「くらい」全体の頻度比（くらい／ぐらい）が 2 前後であることを考えれば、形容詞（と形容詞活用型助動詞）に後接する際にくらいに偏る、という点は動かないと見られる。

Hosei University Repository

表 2-2 「新潮文庫の 100 冊（日本人作家）」における、形容詞に付く「ぐらい」「くらい」

	ぐらい	くらい	頻度比（「くらい」の用例数／「ぐらい」の用例数）
形容詞	2	120	60.0
助動詞「ない」	3	75	25.0
助動詞「たい」	2	26	13.0

3-3　検討

3 節全体として、動詞・形容詞に後接する「ぐらい」「くらい」においては、当該資料における「ぐらい」「くらい」の平均的な姿よりも、「くらい」に偏ることが示された。この傾向は、1 節で挙げた湯澤（1954）の指摘 C「用言、助動詞に付くときには「ぐらい」が普通で、「くらい」のつくこともある。」とは、ある意味反対の傾向であり興味深いが、逆に言えば通時的な解釈を難しくしている傾向であるとも言える。

4. コソアド系連体詞に後接する「ぐらい」「くらい」

4-1　調査概観

本節ではコソアドに「ぐらい」「くらい」がつく場合について調査を行う。ここでも主な資料は BCCWJ「書籍」とし、補助的に「新潮文庫の 100 冊（日本人作家）」を用いる。動詞等に後接する場合よりも全体的に用例数が少ないため、コソアド全体を 1 まとまりとしてみた数値も記した（「計」の欄）。下記表 3-1 の結果を見るに、コソアド系連体詞に付く「ぐらい」「くらい」は「ぐらい」「くらい」全体の頻度比に比べ、「くらい」に偏っていることが見て取れる。

Hosei University Repository

表 3-1　BCCWJ「書籍」における、コソアド系連体詞に付く「ぐらい」「くらい」

	ぐらい	くらい	頻度比（「くらい」の用例数／「ぐらい」の用例数）
「この」	10	74	7.4
「その」	20	86	4.3
「あの」	0	6	×
「どの」	21	287	13.7
計	51	453	8.9

補助的に「新潮文庫の 100 冊（日本人作家）」で調査を行った結果は以下の通りである。用例数（特に「ぐらい」の数）が少ないため、頻度比の数値についてはある程度幅をもった解釈が必要であるが、やはりこのケースにおいても、「ぐらい」「くらい」全体の頻度比（くらい／ぐらい）が 2 前後であることと比較すれば、「くらい」に偏っているという点は動かないと考えられる。

表 3-2 「新潮文庫の 100 冊（日本人作家）」における、コソアド系連体詞に付く「ぐらい」「くらい」

	ぐらい	くらい	頻度比（「くらい」の用例数／「ぐらい」の用例数）
「この」	6	25	4.2
「その」	5	48	9.6
「あの」	1	9	9.0
「どの」	3	84	28.0
計	15	166	11.1

Hosei University Repository

4-2　検討

3 節で見た、動詞・形容詞等に後接する場合と同様、コソアド系連体詞に後接する場合も、「ぐらい」「くらい」全体の頻度比に比べ、「くらい」に偏ることが明らかになった。「この」「その」「あの」「どの」それぞれの語彙によって状況に差はあるものの、BCCWJ「書籍」・「新潮文庫の 100 冊（日本人作家）」両資料ともに、すべてのケースにおいて、全体の頻度比 2 前後という数字を下回ったり、2 に近い数字が現れることがないというのは、やはり明確にこのタイプが「くらい」に偏っていることを示している。1 節との関連で言えば、湯澤（1954）の指摘 B「「この」「その」「あの」「どの」に付くときは「くらい」」という偏り（原則）が、かなり弱められたとはいえ残存していることを伺わせる結果である。

5　まとめ

以上、「ぐらい」「くらい」の分布傾向について、主として用言等に後接する場合、コソアド系連体詞に後接する場合について調査検討を行い、この 2 つの場合においては「ぐらい」「くらい」全体の平均的な姿に比べ、「くらい」に偏る（「くらい」の頻度比が高い）ことが明らかになった。今回調査を行わなかった名詞に後接する場合については、金城（2011）での調査検討でも見られるように、語彙によるゆれが甚だしく、一般化が難しいが、いずれ調査を進めたいと考えている。

〔注〕

1　BCCWJ については国立国語研究所 web ページ
http: ／／ www.ninjal.ac.jp ／ corpus_center ／ bccwj ／
を参照。

2　表記・音声のバリエーションとしては「ぐらゐ／くらゐ」「ぐらひ／くらひ」「ぐれえ／くれえ」などがある。いずれのバリエーションにおいても清濁の対があるようである。

Hosei University Repository

[3] ただし例の多くは現代とは異なり、「このくらいな」のように、「くらい」のあとに「な」がついて形容動詞連体用法として用いられるものが多数を占めるという。また、この時期には指示代名詞「これ」「それ」「あれ」「どれ」には「ぐらい」「くらい」は付かない、すなわち、「これぐらい」「それぐらい」「あれぐらい」「どれぐらい」「これくらい」「それくらい」「あれくらい」「どれくらい」という用例は見いだされないという。

[4] 下記の例が挙げられている。
一粒十六文くらいな涙を落シたり…　（八笑人）

[5] 国会会議録の資料的性格（話し言葉資料的ではあるが、完全な話し言葉資料でもないという点など）については、松田（2008）ほか参照。

[6] 金城（2011）p21、表 2 による。

[7] ちなみに、金城（2011）における、BCCWJ デモンストレーション版「雑誌」の用例数は、「ぐらい」597 例、「くらい」1237 例で、この出現頻度比も 1237 ／ 597=2.1 である。

[8] 助動詞レル・ラレル・セル・サセル、テ形補助動詞つきの用例も含んでいる。タイ・ナイ・テホシイ等の形容詞活用型助動詞付きの例はカウントしていない。

[9] 助動詞「ない」につく場合に「くらい」に偏る傾向のあることは、金城（2011）にも指摘がある。

参考文献

NHK 放送文化研究所編（2005）『NHK ことばのハンドブック　第 2 版』日本放送出版協会
奥津敬一郎他『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
北原保雄編（2003）『明鏡国語辞典』初版
金城克哉（2011）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）を利用した「くらい」・「ぐらい」の研究」『言語文化研究紀要（琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系』20
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編（2000-2002）『日本国語大辞典』第二版　小学館
松田謙次郎編（2008）『国会会議録を使った日本語研究』ひつじ書房
湯澤幸吉郎（1954）『江戸言葉の研究』明治書院